

キド効果

海野十三

青空文庫

「うふふん。——」

と咳せきばら払いをなされた木戸博士は、ご自分の計算機からお立ちになり、ズカズカと助手の丘数おかかずお夫の席までお出でになった。

「こういう事になったよ。——」

と仰おっしゃ有ると、丘助手の前へ、三枚の曲線図をバサリと投げだされた。

「……」

丘助手は、突然の博士のお出でに、思わず襟えりを正ただして立上った——というより、飛上ったという方が当あつているかも知れない。何しろ丘数夫は、この研究所では極ごく新しん参ざん者ものなのであるから。「この第一図、第二図、第三図の三つを見給え。すべては明めい瞭りょうすぎるほど明瞭めいりょうじゃ」

博士は Fig. 1 Fig. 2 Fig. 3 を、英語で図番号をうつつである三つの曲線図を、一列にキチンと並べられた。

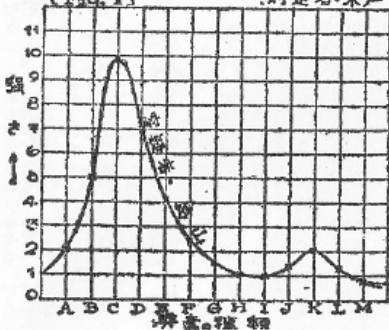
「はア——」

丘助手は頓とみに返辞とみもなりかねて、図面の上に視線のいなずまを降おらせた。

(測定者・木戸とあるからには、これは先生の測定されたものに

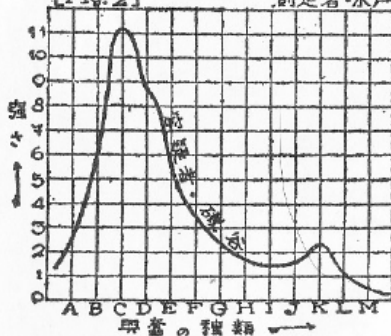
[Fig. 1]

測定者・水戸



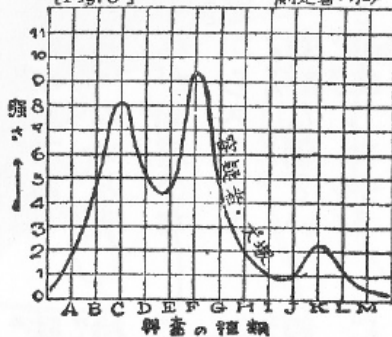
[Fig. 2]

測定者・水戸



[Fig. 3]

測定者・水戸



違いない。なんだか山の形をした曲線が出ているが、第一図のと第二図のとは富士山のような形だ。第三図のだけは、ふたみがうら二見浦の夫婦岩を大きくしたように、二つの瘤こぶがある。これは一体なんのことだ)

と丘助手は三つの図案を見較べ、ちよつと小首かたむを傾けた。

「実に明瞭じやろうが……」

と木戸博士は、お独りひとで感に堪たえながつて居おられた。

「はア、はア——」

(で、これは早く三曲線の意味を呑みこまないと、先生に対して申訳ない——申訳ないらしい)と丘助手は一生懸命に理解しようと、三曲線をその網膜もうまくに送りこんでいる。(容疑者の鳥山からすやま)

と磯谷いそたにと犬塚いぬつか——すると、これは三人の容疑者に関するものらしい。三人の容疑者と……ハテナ……)

「ウン」と思わず口走って、

(そうだ。あの事件の容疑者のことかも知れないぞ)と彼は、ようやくのことで思いだした。

あの事件——とは？

それについて筆者わたくしは、次に短い紹介しょうかいをして置きたいと思う。

満洲まんしゅうの、ずっと北の方の話である。

地図を開いてごらんになると判るが、東支鉄道とうしが黒竜江こくりゅうこうしよ省しょうを横断している。

なおよく御覧になると、この東支鉄道は大興安嶺たいこうあんれいをプツリと横断しているのだ。場所は博克図駅ブヘドと興安駅との間に於ておいである。そしてもっと詳しく云うと、この両駅の中間に「興安嶺こうあんれいト隧道トンネル」と名付けられた長さ三キロメートルつまり三十町ちかくもある大トンネルがあつて、これが興安嶺をプツリと横断しているのだ。あの事件というのは、実にこの隧道内に於て起つたもの

なのである。

さて事件のあつた朝というのが、こと稍やや旧聞きゆうぶんに属するが去年の夏八月の某日のことだった。午前七時丁度ちようどという時刻にこの博克ブ図ヘド駅を問題の列車は興安駅の方へ向つて進発したのだった。長時間の夜汽車だったもので、室内は煙草のひどい煙と、悪食あくじき乗客の口臭と、もう随分永く女なしでいる若い旅行者たちの何とつかオトコ臭い匂いとで、ムツと咽むせかえるような実に堪たえがたい一夜だった。それが間違ひなくやってきた黎明れいめいと共に、ガタンと落とした窓からスースー脱ぬけていつてしまつて、代りに新鮮な空氣が、新鮮な朝という容器に盛られてみなみなに薦すすめられ、ホツと蘇そせい生したような氣持になつた。殊に列車が博克ブ図ヘド駅を出てか

らは、窓外にスクスクと伸びた白樺しらかばの美林が眺められ、乗客も乗務員ももう何事も忘れて、貪むさぼるように朝の空気を肺臓へ送りこんでいた。

「あの白い白樺の幹と、女の股とは、どっちが色が白いだろうなア」

「ウン。うわツはツはツ」

「うわツはツはツ」

神をも恐れぬというべきであろうか、何といつても此処は奥地を走る列車内のことである。こんなあられもない言葉を吐き出す一団が、ひと車輛全部を貸切りにしていても、あえて驚くにはあたらぬ。

この一団というのは、開発移住団と称して一行四十名ひかたまり一と塊かたまりとなつてくりこんできた連中なのであるが、開発の美名に隠れて何をなするつもりか判つたものではないギヤング一味だつた。それも、銀行を襲つてケチな金を奪い、後ですぐ検挙されるような青いギヤングとは少しギヤングが違ちがうので、非常に統制と訓練とに富んだ云わば本格的暴力団ともいふべき種類のものであつた。一行は赤でもなく白でもなく、親分「岩」に率しいられてその胸三寸次第で如何様いかようにも突入していつたのだつた。

ただし此この「岩」こと岩いわ丘おか岩九郎はその物もの凄すごい腕前をもつて、単なる風ふう来らいギヤングとしてでなく、或る有力者を脅迫し相当たう大だいぴらに行動していた。それは、この怪けしからぬ一味が、当局

の厳しい取締あみめの網目をすりぬけて此処ここ満洲を堂々と貸切列車で押し進んでいっているということから考えても、それと肯うなずけるだろ
うと思う。——筆わたくし者は簡単に喋しゃべると断つて置きなながら、「岩」
一味の説明に大変手間どってしまった。

さて此の一団の乗った列車は、白樺びりんの美林をめぐる二十七曲りを
をどうやら切り抜けた末、

「ぼーッ」

と警笛一声、例の長さ三十町もあるといわれる興安嶺こうあんれい隧道トンネル
のなかへ潜もぐりこんだ。

たちまち轟ごうごう々とひどい隧道内の反響ごうごうだった。明るい室内の光
線が急に曇り、黒インキがどツと流れだしたように暗闇が押しよ

せてきた。

「ああ」

誰かが低い声で叫んだ。

「ああ、電灯が点かない……」

別の声が呻吟いた。

矢のように走り去る光線だった。僅かに残光が窓枠の四角な形を切り出していたが、それも吸い取りがみ紙で吸い取られるように薄れていった。そして遂に黒インキのような絶対暗黒がやって来た。その絶対暗黒という魔物は、尚も恐ろしい力で室内の空間を押し拡げていった。

レールの上に狂奔乱舞する車輪の殷々たる響が耳底を流れて

ゆく——それだけのことと感覚で、乗客たちは自分が生きている
ということ^{かろ}を辛うじて認識した。

しかし正確に言えば、この間自分の生きていることを既に認識
し得ない乗客が一人あつたのだ。

「ウーム」

という低い呻^{うな}り声を耳にした者は、かなりにあつた。

はッ——。

と思う間もなく、ガーンと厚い鉄板を一つ叩きつけたような音
がして、それに引続き遠くの彼方へ地震が動いてゆくようなとで
も云うより外に云いあらかわし方のない気持の悪い振動が、ゴトゴ
トゴトと向うの方へ遠のいていった。

ふたたび列車が、パツと明るい隧道の向うへ脱けいでたときには、四十人の団員が、いつの間にか三十九人になっていた。

ガン、ガン、ガン。

機関車に近い方の扉が自暴やけに鳴つて、やつとそれがガラリと開くと、真赤な顔をした車掌がピストル片手に飛びこんで来た。

「だツだツ誰です。扉を内側から押さえていたのは……。けツけツ怪しからん」

六尺豊かな、まるで角力取すもうとりのような専務車掌は、湯気ゆげのたつような怒り方だった。

ギヤング一団は、鬼がお姫様に化けたように取り澄まし、そつぽを向いて知らぬ顔をしていた。

「いま隧トンネル道の中で、何か変事があつたと後部車掌が報せてきたのに、これじゃ駈けつけないが出来ないじゃないですかッ。もしも重大なる変事だつたら……」

「おおい、此処だア」と其の時、一輛後車室の窓から後部車掌が声をかけた。

前部車掌は車室を縦じゆうそう走して、後部車掌のところへ飛んでいった。

「あれを見ろッ」

後部車掌は真まつさお青な顔をして、握ったピストルの慄ふるえる銃じゆうこ口で指し示した。

「うわッ。——やったナ！」

前部車掌の顔面も、たちまち真蒼まつさおに変わっていった。

車輛と車輛との間が、鋼鉄こうてつしやたい車体しやたいのところといわず、連結器しずくのところと云わず、真赤な血飛沫ちしぶきがベツトリ附着し、下の方へ雫しずくがポタポタと墜おちていた。墜おちた真赤な斑点はんでんは、レールとともに飛ぶように後へ走った。

過失？ 故意？

二人の武装車掌は、ツと寄つて耳打ちをすると強く肯うなずき合つた。そして両方に別れると何喰わぬ顔をして、貸切車室の両出口に立ちふさがつた。

本部からは既に此の列車へ、例の一味を警戒すべしという電報がきていたし、トンネル隧道に入つて不思議に電灯が点かなかつたこと、

そこへ今の惨事さんじが発生したと、これだけあれば車掌たちの執とるべき手段は至極しごく明めい瞭りょうだった。

果然かせん、列車が興安駅きやうあんに著つくか著かない裡うちに、早くも警備軍の一隊がドヤドヤと車内に乱入すると、矢庭やにわに全員の自由を拘束こうそくしてしまった。

3

興安嶺きやうあんれいトンネル殺人事件！

丘助手は改めて第一図、第二図、第三図を見直したのだった。

「うふふん。——」

と咳せきばら払いをなされた木戸博士は、乾枯ひからびた色艶のわるい指ゆ頭びさきをFig. 1に近づけられて扱さて仰おっしや有あった。

「興奮曲線——と名付けるわしの研究じゃ。どうしてこの曲線を画えがくか。それは Zツアイトシユリフト・フユール・ファイジーク・F誌・P誌 一九三〇年九月号

第三〇頁ページに出して置いたところで明らかじゃ。要するにその隅にある日記装置じきでこれだけのものが画けるんじゃ。凡そ人間およというやつは、興奮の振動体のようなもので、いつも二十四時間、なにかかにかの興奮に神経を焦こがしている。腹が減つてくると、食欲じきが起り、牛肉のスキ焼が喰たべたいとか天井をムシヤムシヤやり

たいとか興奮してくる。夜となれば昼間の精神的刺戟おが滓おりの如く
 析せきしゆつ出してきてこれが夢という興奮を齎もたらす。興奮のない人間と
 いうのは殆んど稀まれじや。

興奮は神経的なものじやから、電気現象の一種と考えることができる。そして電気現象であるによつて其の強さを測定することが出来る。強い興奮はメートルの針を大きく振らせ、弱い興奮はメートルの針を少しばかり動かす。ところでじや。わしが曩さきに Z
 エー・エフ・ペー
 ・F・P 誌に発表したとおり、わしは興奮を其の種類によつて
 分析することに成功したのじや。これは何しろ一ひと通りや二ふた通
 りの苦心ではなかつた。……」

そこで木戸博士は、研究当時の苦心を偲しのぶかのようにジツと瞑め

目し、しばし手を額の上に置かれたのだった。

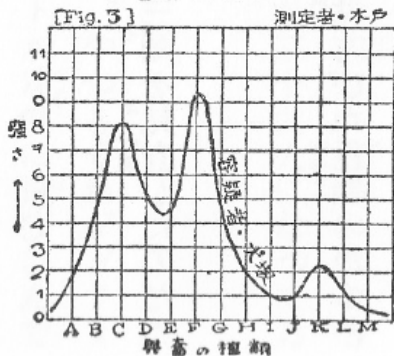
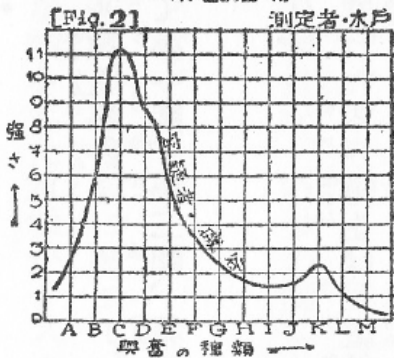
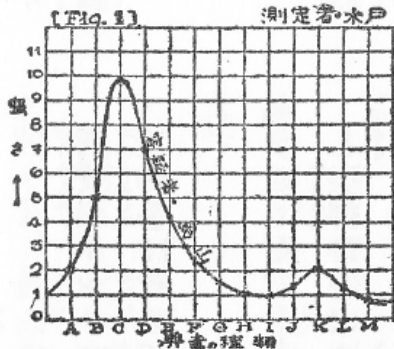
「実に骨を折ったものじゃ。しかし結果をいえば至極簡単である。興奮の種類を分けることは、丁度ラジオ受信機の目盛盤を廻すと、その目盛に依じて各所の放送局が出てくると同じことじや。東京の第一放送が出ているのを、すこし廻すと広島FKの放送が出る。もつと廻すと札幌のIK、名古屋のCK、新潟のQK、熊本のGK、静岡のPK、仙台のHKなどという具合に、二十七ヶ所の違った放送が目盛盤のひねり様一つで出てくる。

それと似た仕掛けを、例の装置の中に設けてさえ置くと、興奮の種類を分けることが出来るばかりか、さまざまの興奮の強さを知ることが出来る。ラジオの目盛盤をひねって各局を聴いてみる

と、東京の第一放送は強いが、広島の放送は大変弱いとか、札幌のは全然感じないとか、次の名古屋のは東京第一ほどではないが相当に強いとか……そんな風に強さを比較することが出来るのと同じじゃ。つまりAの興奮は強さが2で、Bの興奮は強さが5で、Cの興奮は強さが10、Dの興奮は強さが7などという風に、強さがメートルの上にあられる。それを図に画くと、Fig. 1のような曲線になる。よいか——」

木戸博士は鉛筆を手品師のように何処からともなく取出されて図面の端にスラスラと数字を書き並べられたことである。

「まずAが2じゃ。すると横の軸に『興奮の種類』がとつてあつて、そのAの上に、強さを示す縦の軸の数字2の高さに一つの点



をXと記す。次に隣りのBの上に、興奮の強さをあらわす5の高さをとりX印をつける。それからCの上には、一番強い10の高さのところにもX印を書きこむ。——こうして求めた点はもつと多いのじやが、その点で線を横に繋ぐとこのFig. 1のような曲線になる。この曲線を一と目見れば、其の人間に宿っている興奮が手にとるようにアリアリと判る。そこで次のFig. 2 Fig. 3も、同じ手段で興奮曲線をとることが出来たのじや」

測定者・木戸——とサインされてある此の貴重な三つの曲線の意味は、漸く助手の丘数夫の頭脳に臙気ながら理解されるに至った。しかしAとかBとかCとかいう興奮の種類は、じたい如何なる興奮を示すのであるか、容疑者の烏山とは誰か、磯谷

Fig.1

A 2

B 5

C 10

D 7

E 4

F 2,5

G 1,5

H 1

I 1

J 1,4

K 2,1

L 1,3

M 0,8

とは、
犬塚いぬつかとは？

4

「先生」と丘助手が呼びかけた。

「うふふん。——」と博士は咳せきばら払いをもって答えられたが、講義の腰を折られたことを腹立たしく感じていられることは、その咳払いの調子からソレと察せられるのだった。

「先生。これは例の興安嶺殺人事件と関係のある問題なのでござ

いますか」

「……」博士は無言で、暫しばしは口をモゾモゾせられたが、これはかわりもの変者をもつて鳴る博士の性せいじよう状として「然しかり」を意味するものに外ほかならぬ。「それで三十九人の同車していた連中について、この興奮曲線をとつたのじゃが……」博士の話はイキナリ実験の話へ飛んだのである。

博士としては無理もないことである。理学博士木戸信之氏きどのぶゆきは真面目なる学徒以外の何者でもない、随したがつてシャーロック・ホームズでもファイロ・ヴァンスでも、また帆村莊六ほむらそうろくでもないから、事件の続き具合などを話す気持はない。これは筆者が鳥渡ちよつと解説をして置こう。

40-1=39で、三十九人の残りの人々の上に、殺人の嫌疑けんぎが落ちた。殺人であつて自殺ではないことは、後のちに隧道の中から探し出された轢断屍体の咽喉部いんこうぶに残る紫色の斑紋はんもんから明らかなことだつた。扼殺やくさつ——つまり喉を締めたのだ。そして屍体を窓の外へ突き落としたのだつた。屍体といつてもまだ生なま暖あたいやつが、車輛と車輛の間からレールの上に落ちるが早い、ザクリとやってしまったのだつた。パツと飛び散る血潮が車輪から車体の下部から周囲一面を真赤に染めた。

さてこれは本来ならば、大した問題にもならず、通り一いっぺん遍の刑事問題として扱われ、適当な人間が犯人と名乗り出て処刑されれば済む筈だつた。だが本件に限り甚だ面倒な事情があつた。殺

されたのは、「松」こと椎名咲松しいなさきまつという男であつて、これは団員となつているが、実は其の筋の密偵みつていをつとめていた人物だつた。椎名咲松の殺されたことは公けおおやに対しての挑戦と見られた。そこで事件は俄然がぜん複雑な雲行きとなつて、其の筋では其処に立ち現れた偽にせのロボット犯人をオイソレと受取つて処刑するのでは、一味への威厳いげんじょう上どうしても好ましからぬことであつた。どうしても真犯人を見出して処刑し、永年の癌がんであつた彼等一味の、のさばり加減かげんを撓たわめる必要があつた。

ところで犯跡を調べるといふことになるに係官はハタと当惑しないわけにゆかなくなつた。それというのが、なにしろ同車していた三十九名は皆一味のもので、親分の岩の命令で互たがいに連絡をと

り、決して都合の悪い真実を喋ろうとはしなかった。そればかりではない。なにしろ真暗な隧道内の出来ごとだ。調べるにして調べるべき問題がない。犯行のあつた時刻の前後五分間というものは、全く暗黒だつたのだから。今から内地の優秀な係官を派してもこれも駄目だつた。証拠とすべきものが非常に^{すくな}に、悪に^た長けた三十九名が気を合せて証拠^{しょうこ}湮滅^{いんめつ}をはかるのだから、これは探し出そうという方が無理である。

遂に^{ばんさく}万策^{ばんさく}つきて、已^やむなく木戸博士の出馬^{しゅつば}を乞^こねばならぬこととなつたわけだつた。博士も自信は大してあるわけではなかつたが、考えの末自分の研究装置に多少の改良を加えて、これに臨むこととなつた。そこで三十九人の生き残つた一味に対して、

「興奮曲線」がとられたのだった。三十九枚の曲線から、博士が最後に摘てきしゆつ出したものは三枚で、これが烏からすやま山栄二郎、磯いそた谷狂助、犬塚豹吉いぬつかひょうきちという人間から得たものだった。三人は未だに、博士の研究室に監禁せられている。他の三十六人は釈放せられ、或者は再び満洲に赴き、或者はもう断念して他へ足を向けた。

「……その中でわしの注意を集めたのは、この烏山、磯谷、犬塚の三人の容疑者のものじゃ」と博士は語られる。

「一体この興奮曲線の種類に、ABCうんぬん云々と区別することは出来ているのじゃが、Aは何の興奮、Bは何の興奮という風に、全部

がハッキリ判っているわけではない。目下わしは研究中なのだが、まだ完全でない。しかし今度の問題を解くには充分間に合う。というのが、此のC・という興奮は憎悪ぞうおとか嫉妬しつととかいいう種類のもので、このように著いちじるしいのは三人に限る。殺人の動機としては、充分に憎悪なり嫉妬の興奮がないと、手を下せないものじゃ。この三人のみに、このC興奮があることがわかった。過去現在将来に人殺しをするとすればこの三人の内じゃ。

ところでFig. 1とFig. 2の鳥山からすやま、磯谷いそたにの両名のもものは先ずよい。注目すべきはFig. 3の容疑者犬塚いぬつかのものじゃ。これにはF興奮と名付けるべきものが、極めて著しく出ているではないか。このF興奮とは何ものかというに、これはわしの研究結果に

よると、実に殺人興奮を現わすものなのじゃ！」

「すると此この犬塚という人が、殺人者なのでございますか」

丘助手は、あまりに明瞭な結果に舌を捲いて叫んだ。

「そうじゃ、犬塚豹吉が椎名咲松を締め殺して、列車から突き落したのじゃ」

「ああ、それにしても……」丘助手は、博士の門に入ることの出
来た喜びを沁しみ々しみと感じたことだった。「この憎にく々にくしく聳そびえ立
つ殺人興奮の曲線？」

「これさえ見れば如何なる悪あつ漢かんといえども犯はん行こうを隠かくしきれる
ものではない」

「先生。では此の装置を早さつ速そく大量に製作して全国の法廷と警察

に送られては如何でしょうか。無駄な取調べを廃して、直ぐ事実が判明するわけですから、司法上の一大改革だと思えます」

「だがしかし……。うふふん」と木戸博士は首を左右に振った。

「この興奮曲線を取るには非常な熟練が要るのじゃ。大学院を出てきた君にすら、こうはうまく取れない筈じゃ」

5

理学士の称号を貰い、三年の大学院の研究を終えて来た丘助手

にとつて、博士の仰有つた一言は、いくら木戸博士と仰ぐあおにしても、聞き捨すてになり兼ねた。そこで彼は博士に熱心に乞こうて、例の装置をつかつて、例の犯人から興奮曲線を測ることを許して貰いたいと頼んだ。

「じゃ、やつて見給え」

博士は遂に折れて、丘助手の望みを叶かなえて呉れた。

丘助手は、監禁室から犬塚を引張り出すと、実験室の台上に引据えた。そして其の身体の直ぐ近くに装置を搬はこぶと、複雑なスウィッチや抵抗器やダイヤルを操つて、興奮曲線を出すために数値データを観測したのだつた。

そしていよいよ書き上げた曲線というのが、第四図に示すよう

なものであった。測定者という項目には、「丘」と肉太のサインを入れることを忘れなかった。

「ほほう——」と博士は提出されたFig. 4を、博士が前に同じ犬塚についてとったFig. 3と並べてみて、妙な声をあげられた。

笑われているのか喜ばれているのか、丘助手には暫しが程は全く不明だった。

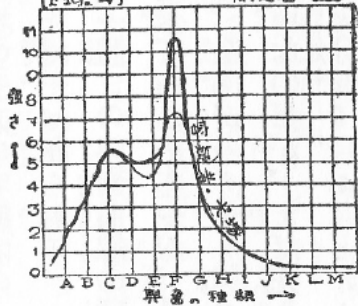
「これは相当なもんじや」と博士は鼻眼鏡を外しながら仰有った。
「C興奮とF興奮とが明瞭に出ているね」

「ははア——」丘助手は先ず安心をした。

「だがじゃネ」と博士は鼻眼鏡で丘の作った曲線図を叩きながら仰有った。
「まだまだ実戦に臨むのには青いじやよ。これ見給

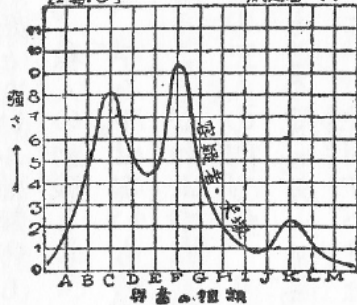
[Fig. 4]

測定者・庄



[Fig. 3]

測定者・水戸



え、例えばC興奮じゃ。わしの結果でも三人の内此の犬塚が一番低いけれど兎も角も8を越えている。しかるに君のは5.5ぐらいだ。肝心のF興奮はまた莫迦にひどく出ている。見たところ曲線の形も僕のとは大分変っているじゃないか。これが熟練と不熟練との相違じゃ」

「仰おっしや有る通りです」と丘助手は恐縮きようしゆくした。

「それからもう一つ此処を見給え」と博士は第三図のK興奮のところを指した。「ここいちじるのところに著しくないが、K興奮が出ていないか」

なるほど博士の測定した分には、第一図から第三図まで、ここ

のところ、少し高いところが出ていのに、丘助手には無かつた。可也かなりやったつもりだったが、どうしても出なかつたのだつた。「どうも有難とう存じました」恐縮しきつた丘は、そこでヒョコリと頭を下げた。

6

それから二ヶ月の月日が流れた。

其の日、丘助手は午前中大学に出勤するばんに当たっていた。彼

は例のとおり第二十八番教室に出て、十四五人の理科の学生のために、「脳組織に於ける電気振動論」を講義していた。

そのとき入口の扉がパクリと開いて、一度も笑っている顔を見たことが無いといわれる用務員・喜見田が入ってきた。彼は無言のまま教壇に近づくと、一枚の紙片をその上に載せ、まるで何事もなかつたような顔をして、又前の入口から出ていった。

(何ごとだろう?)

丘先生——すくなくとも唯今の時間、この教室に於ては——黒板に書き連ねている数式を途中でやめて、机の上の紙片を見た。そこには次のような鉛筆の走り書がしてあつた。

「木戸博士から再三再四電話が懸ってくるので、時間中ながら

よつと

渡お伝えする。曰く、大学の講義なんかいい加減にして早くこ

つちへ帰つて来ないと首にするぞ、とき。松下生まつしたせい」

松下というのは、丘よりも一年前に卒業した助教教授の名だった。これで見ると、何か急用が出来たらしい。真逆学生まさかたちに「講義なんかいい加減にしろといわれたから」と云つて退場するわけには行かないから、急用だといつて講義を打切つた。

自動車を拾い、慌あわてて木戸博士のところへ帰つて来た丘助手は、室に入るなり、博士の様子がお違いになつているのに駭おどろいた。あの沈着な博士が、まるで檻の中に入れられたライオンのように、室内を歩き廻つていられるのだった。無論、丘助手が入つて来たことなどには氣のつかれぬ模様だった。

「先生。唯今帰りました」と丘は声をかけた。

「おお、丘君」博士は興奮にギラギラ輝く眼を助手の方に向けて叫んだ。「いや、大変なことを発見したのだ。わしはそれに「キド現象」という名称をつけたよ。それで直ちにわが学界へ発表すると同時に、英米独仏の四ヶ国の学術協会へ原稿を急送したいのだ。君、直ぐに翻訳にかかってくれ給え」

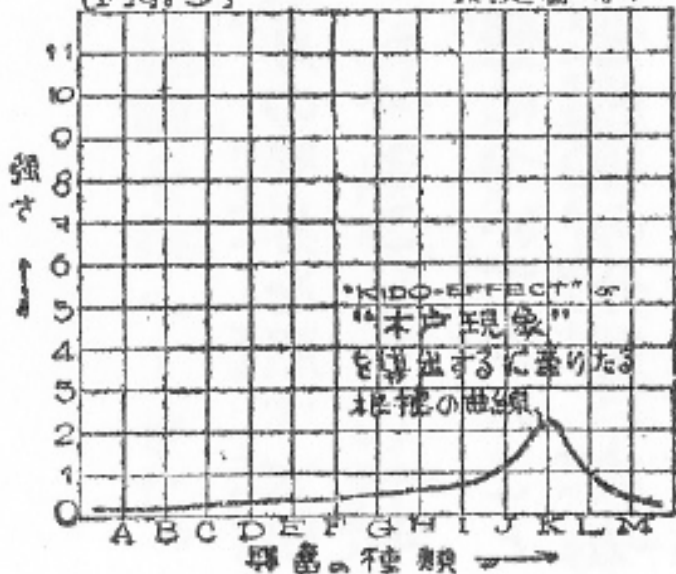
丘助手は、博士が錯乱せられたのかと一時は考えた程だった。しかし事情は段々と判った。

「……そういうわけで、わしは興奮曲線の中から、更にK曲線を摘出することに成功したのだ。これ見給え」

そういつて博士は、Fig. 5と書いてある第五図を、ご自分の机の

[Fig. 5]

測定者・木戸



上からもぎとるようにして丘助手の前に置かれた。その図を見ると、これは今までの曲線図とはまるで違っていた。K興奮にあたるところに、僅かの隆起りゆうきのある曲線で、わざわざ「木戸現象きどげんしょうを導どうしゆつ出するに至りたる根拠の曲線」と書き込まれていた。

「これがK興奮曲線といたいものだ。これは前から疑問に思っていたのだが、例の三人の容疑者烏山、磯谷、それに真犯人の犬塚の三人の興奮曲線の中にも、それぞれ認められる隆起なのだ。強さは殆んど一樣だ。他の著いちじるしい興奮を消してみると、結局このFig. 5になるのだ。この三人に共通なK興奮なるものは、一体何を意味するものだと思う。答え給え」

博士は正面からズツと丘助手を睨にらみつけるようにして云われた。

「さあ、私には判りませんが」

「判らん？　じゃ教えてやろう。これは異常興奮なんだ。精神異常者としての素質のあるのを物語る興奮なんだ。そして此の異常性興奮のあるのは例の三人だけではないのだよ。興こうあんれい安嶺トシネル隧道

殺人事件に関係のあつた残りの三十六人について測定した曲線にも、少しずつ現れているのだ。わしが其の他に測定したものにもたいてい大抵いK興奮の隆起がでている。つまり結論はこうだ。『人間は誰人だれに限らず、精神異常の素質を有す』ということになる。素敵な発見じゃないか」

「例外はないのですか。つまり、ソノK興奮のない人間は……」

「有るには有る。しかし最近わしの測定した分には全てK興奮が

ある。無いという例外は、古い昔に測定したもののの中にチラホラするだけで、それは問題は無いと思う。兎とに角かく、人間は誰でも精神に異常を来す素質があるんだ！ なんとこわいことではないか。丘君」

「イヤ恐ろしいことです」

いい気持のしない第五凶から眼を外はずすと、丘はツと立って、翻訳に使うため、辞書の並んでいる書棚の方へ歩を運んだ。

キド現象げんしょう！

それを発見した木戸博士の名声は、世界の学界を照す太陽の如く、かくかく赫々としてうち昇った。さもあるべきことで、一年前には、興奮曲線を一人一人の人間の身体について取ることに成功した博士が、短日月の間に更に興奮曲線の分解に成功し、異常興奮曲線をてきしゆつ摘出したばかりか、人間にあまね遍く異常性素質の潜在していることを指摘し、これをキド現象と名付けたのだから、誰しもおどろ驚くのも無理はなかった。今や博士の心理物理学とでもいふべき学問は、世界開発の将来の鍵を握るものだとして、にわ遽かに学界の注目の標ひょう的てきとなった。

ところが突然、全く突然に、キド現象の発見者木戸博士が失^{しつそ}踪^うせられた。

『木戸博士の行方不明に世界学界は大^{だい}恐^{きょう}慌^{こう}！』

『ドクター・キドは失踪後五日を経^ふるも、何等消息発見されず！』

『木戸博士は何者の手に誘拐されたか。キド現象と興奮曲線にまつわる因^{いん}縁^{ねん}！』

『懸賞金一百万円。木戸博士を無事に自邸^{じてい}へ返したものに送る！』
などと、新聞やラジオは博士の失踪のことで持切りだった。

だがどうしたものか、博士の消息は杳^{よう}として聞えなかった。

そして或る日、警視庁の捜査課長が、博士の研究室に、留^る守^{すい}居^いの丘助手を訪ねた。丘数夫は折りふし、孜^し々^しとして机の上に拈^ねげ

た学位論文にペンを走らせていたが、課長の姿を認めると、ペンを留めて元気よく声をかけたのだった。

「やあ、ようこそ、大江山さん」

大江山は捜査課長の苗字みょうじだった。

「また御邪魔に参りましたよ」課長は照れくさそうに云った。

「今日は御約束の十三日でもありませんし……」

「僕も忘れやしません。ですが警視庁のお見込はどうなったんですか」

「そいつを聞かれると、大いに憂鬱ゆううつになるのですがねエ」と大

江山課長は禿かかった前額まえびたいをツルリと撫であげた。「いつか

のギャング一味が邪魔になる木戸博士をやっつけたものと考えて

方針を樹たてたのです」

「すると——」

「ところが、どんなにやってみても、一向に駄目なんです。調べれば調べるほど、彼等ギヤング一味に関係のない証拠が上つてきて、実際困りましたよ。今度という今度はネ」

「それで……」

「それで——とは痛い御言葉ですな。こうなれば、貴方の御説を拝聴するより外に、途みちがなくなつたんです」

「そうですか」と丘助手は大きく肯いた。「では今までの行き懸ゆがかりを忘れて、僕の説をお話しいたしましょう」

そういうと丘は机の上から、沢山の曲線図を抱えてきた。

「また曲線図ですか」

課長は苦が笑にいをした。

「徹頭徹尾、この曲線図ですよ」と丘助手はニヤニヤ笑った。

「さあ御覧なさい。これが有名なる木戸博士のキド現象の曲線図です」

そう云つて既に知られている第五図を課長の前に置くと、別に第六図というのを取出して、この両図を並べた。後の方には明らかに、「測定者・丘」という署名があつた。

「横に並べたFig. 6というのは、実は僕の研究の結論なのです。キド現象を現すFig. 5の方を抹殺まっさつして、代りに此の方を皆さんにお薦めすすしたいのです」

「なんですつて？」課長は目を見張つて駭おどろいたのだつた。

「こつちには曲線がないじゃないですか」

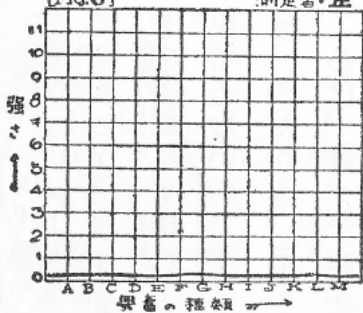
「あるには有るのです。ほら——」といつて丘は図の横軸の極ごくく近くにある、まるで平坦な、力としても有るか無いか判らぬ位の曲線を指した。「この有るか無いかの曲線——つまりこれはラジオで云うと、放送ではなくて、雑音と同じようなもので、本当はなんにも無いものなのです」

「ほほう——」課長は狐につままれたような形だ。

「言葉をかえていうと、『人間には誰にでも必ず精神異常の素質がある』というのがキド現象です。僕のは『人間には誰にでも精神異常の素質がある』とは云えない」という反対の結論なんです」

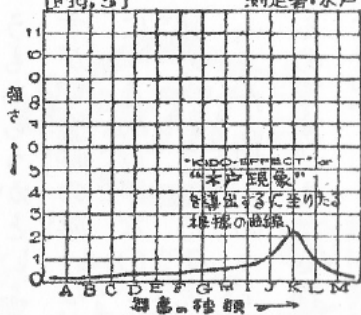
[Fig. 6]

測定者・左



[Fig. 5]

測定者・水戸



「精神異常の素質がないというのですか。そいつは一応有難いことだ。しかし博士には確かにK興奮が多数の人からとった曲線に出ていますよ。失礼ながら、貴方の測定の誤りではないのですか」

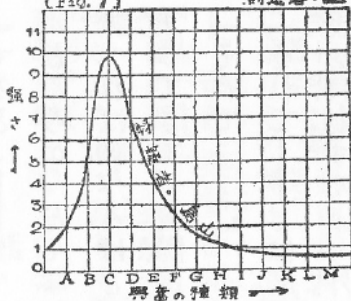
「お疑いは御ごもつと尤もです」と丘はニコニコ笑って云った。「しかしこれには根拠があるのです。実は僕は木戸博士の御測定に或る疑問をもって、極ごくく最近のことですが、大学の理科主任教授里見さとみ先生立たちあ会の上、例の容疑者三名について興奮曲線を取り直してみたのです」

「ああ、有名なる里見謙先生ですか」

「そうです。里見謙先生です。ところが結果は予想通りに木戸博

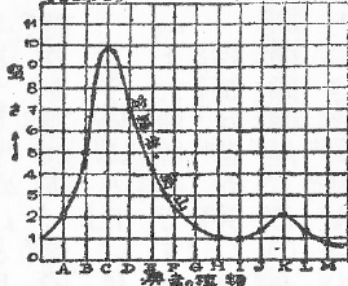
[Fig. 7]

測定者・金



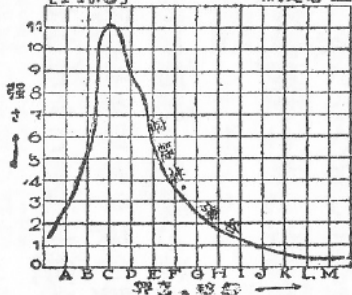
[Fig. 1]

測定者・水戸



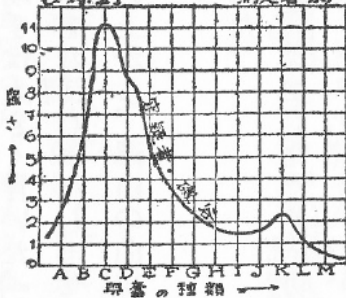
[Fig. 8]

測定者・金



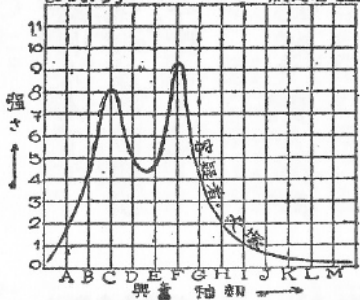
[Fig. 2]

測定者・水戸



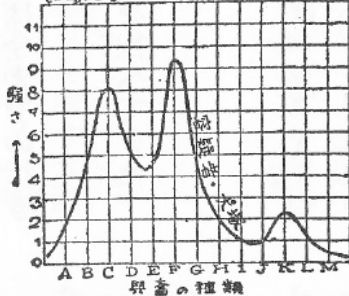
[Fig. 9]

測定者・金



[Fig. 3]

測定者・水戸



士のととは違つて出ました。これです。第七、八、九図の三つです。木戸博士の測定せられた第一、二、三図を並べて見ましよう。どうです。博士の方には同じ形のK興奮が、どの曲線にも現れてゐるのに、僕の測定した分には一つも出ていないのです。どれもこれも男の胸のように——博士はいつだかも、そんな風に云われましたが——興奮のところは、真^まツ平^{たいら}なんです。これが本当の曲線なんです。こうもあろうかということ、ずっと以前、僕の入所当時ですが、恰好の悪いながら、第四図というのを取つたときに、この扁平なのが出たので、鳥^{ちよつと}渡^と疑いをもつたのです。其の後いろいろ研究の結果、一層確信するに至りました」

「すると博士のキド現象に現れているK興奮は一体どうなるので

す。またそれが博士の失^{しつそう}踪となにか関係があるのですか」

「実にお気の毒なことですけどね」と丘は顔を曇^{くも}らせて云った。

「博士には精神異常の素質が潜在していたのです。博士は多分それにお気がつかれなかつたらしい。測定者木戸博士のその異常興奮が、博士の測定されるあらゆる実験結果の中に混入していたのです。恰^{あたか}も測定される方の人間に精神異常の素質があるように誤解されていたのです。これは外にも似たようなことがないでもないのです。「^{ボデー・エフエクト}身体効果」というのも其の一つですが、測定者が身体を装置に近づけ過ぎると今まで地球の方へ逃げていた電気が、今度はその身体を通つて逃げてゆくため誤解を生ずる——という効果をいうのです。木戸博士の身体に隠れていた異常素質が、

興奮曲線に誤りを混こんにゆう入させたんです。『キド現象』という恐おそろしい発見は要するに間違いだったんです。此の誤差混入ごさの効果エフエを、われわれは『キド現象』と呼ぶ代りに、これから『キド効エフエ果クト』と呼ぶことにしたいと思います。第五図のあのK興奮の曲線は博士が、不識ふしきのうちみずかに自らこの『キド効果』を摘てきしゆつ出されたのに過ぎません」

そういつて丘数夫は口を噤つぶんだ。

「すると今、木戸博士は……」

大江山課長が口に出した。

「そうです。先生は悲しい運命の指すままゆびさに到頭とうとう発病せられたのでしよう。その動機というのは、『キド効エフエクト果』つまり昔の

キド現象を発見されたという、その大きな興奮に刺戟しげきされて隠れかくていた異常素質がドツと爆発したのだと思います」

丘数夫はもうそれ以上に、気の毒な木戸博士のことを口にする
勇氣はなかつた。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第2巻 俘囚」三二書房

1991（平成3）年2月28日第1版第1刷発行

底本の親本：「新青年」

1933（昭和8）年1月号

初出：「新青年」

1933（昭和8）年1月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、以下の箇所を除いて大振りにつくっています。

「二十七ヶ所の違った」

「英米独仏の四ヶ国」

※図版は初出からとりました。

入力：門田裕志

校正：宮城高志

2010年9月9日作成

2011年1月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

キド効果

海野十三

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>